
SOULEATER番外編-嵐の文化祭-

コーユー

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

SOULEATER番外編 - 風の文化祭 -

【NNコード】

N1405A

【作者名】 コーラー

【あらすじ】

SOULEATERと名無しの物語の主人公たちが通う「県立豊北高校」にて高校最大の体育祭+文化祭を一緒にした「豊北祭」下克上、裏切り、欲望渦巻くヤリタイホウダイのお祭りの始まりです。時代設定は各お話の一年前です。

文化祭（前書き）

一話完結形にあるつもつです。

文化祭

文化祭 それは年に一度の無礼講の日。

学校公認のイベント。

朝から何だかそわそわとした教室は、なぜかいるだけで気分が昂ぶる。

「よお、今日つて文化祭だつたんだな」

などと俺の机に座つて話しているのは同じクラスの 野村 勇

二。

「だな、おれも今さつき気が付いた。」

あつはつはつはと笑つてみる。

うつ、なんだこの大量の冷たい視線は…

「仕方ないよな、俺たち手伝いあまりしてなかつたしなあ

遠い目をして呟く野村。

「失敬な、俺は手伝つたぞ? 大量にケーキを用意したり、服の素材を探してきたり、周辺の家からフリーマーケット用の不用品を搔き集めたり…」

「そりや『苦労さん。でよ、話し聞いてるかぎり何やるんだ? ウチのクラスは?』

「そりいえばそうだな何するんだ?」

あははと笑いながらクラスを見渡す。

また、冷ややかな視線が…

「止めよう。村八分にされる…」

その言葉に

「だな」

と小さく同意する野村。

「それはお前のせいだ南」

と、後ろの席の生徒が声をかけてくる。

「ナンデスト?」

「出し物は投票で決めることにしたろ?」

「ウム、その通り。ちなみにうちのクラスは40人。

「で、だな、内訳をいうと」

「食い逃げ喫茶13票

着たい放題!貸衣装屋13票

持ち逃げ上等!フリーマーケット13票

「こんな感じ」

また、えらく個性的な出店をすること…

食い逃げ喫茶に持ち逃げ上等ですか…

いつたい何を考えてるんだこのクラスは。

「さあ、今すぐ投票してくれ」

白い正方形の小さな紙が渡された。

「あ、名前はいいよ、匿名だから」

この状況で匿名って意味あるのか?

「書けたか?」

ずいっと投票箱が出された。

「待つて、もうちょっと。」

喫茶店は女子に人気があつて、貸衣装屋は男子に人気が、フリーマーケットはほぼ半々となつていていたようだつた。

何でわかるかって?

後ろで出し物のホールが聞こえるから。

「喫茶店!喫茶店!」

とか。

「ああ、ひるさいな…」

そう思つも頭にこないのは、やはりお祭りの雰囲気があるためだろうか?

ささつとペンを走らせ投票箱に入れる。

すとん。

わりと控えめな音が響いた。

いつのまにか教室が静まり返っていた。
みんな箱を凝視している。

頼む、そんなに期待しないでくれ…

確実にクラスの三分の一は敵に回すんだから
もつともらしく箱のなかを搔き混ぜる生徒。
そしてついに読み上げられる

「出店するのは……」

文化祭（後書き）

三つの曲の話は全部やったこと思っています。
しかも～」で感じで

「も

嵐の喫茶店』・〇（前書き）

ずうつと前に作るだけ作つて放置しておいた小説です。
後半、「名無しの物語」の登場人物が出てきます。

嵐の喫茶店」・〇

「喫茶店に決定しました！」

「どうと沸き上がる女子と一部の男子。
「さつすが南」わかつてゐなあ」
何ていいながら背中を叩く。

バシバシ。

バシバシバシ

いてて…。手加減ないのな…。

ゴス！

「つ！ はあ！」

「なんだ!? 今のはグーだつたぞ! ?

一気に肺から空気が抜けて、むせこむ。

「さつすが南」女子の味方だなあ」

叩いたのは相川 樹。

「やかまし」

ごすっと音がして崩れ落ちる樹。

とたんに

「うおおおお！」

と歎声が上がる。

「見たか今の! ?

「見た見た! すげえアッパーだつた」

「ばつかフックだろ?」

「いや、フリツカーダつた」

いきなり雰囲気が変わった…気がした。

そういうして文化祭が始まった。

俺たちの出店は

「喫茶店」 - 」

学校公認の食い逃げ店で、逃げ切ればただ。

しかし逃げるまでに俺たちに捕まつたら一倍払うといふ店だ。

武器の使用は禁止。

取り押さえればこちらの勝ち。

そして、支払いにきた人数 = 立ち寄った人数とカウントされ、来客が一番多かったクラスは自分のクラスの売り上げをそのままもらうことができる。

そのためみんな必死だ。

手にバンテージを巻き、人によつては肘とかにテープニングを巻いたりしている。

開店時間は10時。

俺たちは控え室で客の様子を確認する。

「去年はレスラーみたいな奴が一人で全員のして行つちまつたんだよな」

しみじみと語る。

「ああ、あつたあつた！その後がら空きになつた隙にたくさん食つたなあ」

どこか遠い目をして呟く生徒。

モクモクモク…女子が落として型崩れしたイチゴショートを咀嚼する。

「とこりでさあ、なんで」 - 」なんだ？」

ウム、型は崩れても味はいいな

サク、サクサクサク…

クッキー生地のケーキをかじる。

「あー、それな、何でもロング・アッパーで意味らしいぞ」

頭をぽりぽり搔きながら答える。

「誰だ？そんな物騒な名前にしたのは…？」

「あいづ」

と今だに違う世界に旅立つている人物を指差した。

「…やりかねないな」

コクコク…差し入れのレモンティーで喉を潤す。

ウム、なかなか美味かった。

「だろ？…？」

名付け親らしい相川は、今だに頭の上でお星さまが飛んでいる模様。あちやあ、ちょっと強くやりすぎたか…

少し後悔。

十時になり、開店と同時に客がちらほらと。

のんびりと食べているのみで食い逃げしよつとこつ配はぬ。

特に何事もなく午前は終了。

午後三時…

「…来た。」

一瞬で控え室に緊張が走る。

来店したのは二人組の男。

年は高校生ぐらいだろうか？

片つ端からケーキを頼んでいる。

「すつげえな…」

誰かがつぶやく。

それもそのはず、一つ食べたら一つ頼んでを繰り返し、回転寿司のようになっている。

「あ…俺、あの人バス…」

と、急に一人の男子が顔色を変えた。

「あ…俺も…」

また一人。

「ん? どうした? なんかあるのか?」

いぶかしげに野村が客をチェックする。

「……………スマン、俺もバスだ」

さあつと顔色が青くなる野村。

? いつたいなんだって言うんだ?

一部の人間を除いて皆その男一人組みに関わりたがらないようだ。

そのころ当の本人たちは……

「…よく食つなお前も…」

片方の男は一皿目のモンブランを突付きながら目の前の男の旺盛な食欲にため息をついた。

「おう。何せタダだからな」

「何もまだ決まつたわけじゃないだろ?」に。つかまつたら倍額支払うんだぞ」

頬張りながら「大丈夫だつて」とジェスチャーをしている。

「ほえほりふおふいふいのふあ?くふあなくふえ?」

「飲み込んでから喋れ飲み込んでから」

口いっぱいに頬張ったケーキを紅茶で一気に押し込む。

「それよりもいいのか? 食わなくて」

「ああ…さすがにお前の食いつぶり見てたら胸焼けがしてきたよ…」

このときの一人の戦績。

合計30皿

内訳: 28対2

「食いすぎ…」

「そうか？」

「とも無げに次のケーキを注文している。

「まだ食つのか」

「いや、これはお土産だな」

「ほう？」

「今日野乃香ちゃん来れなかつただろ？だから持つていつてやれ」「悪いな」

「いいつていいつて」と手を動かしながら紅茶を啜る。
しばらくして、ウェイターが箱に入つたケーキを持つてきた。

「ホレ、持つてけ」

そういうつて押し付けながら席を立つた。

そのころの控え室…

「おー立つたぞ！」

「おお！？今行くか！？」

「バカ、まだ食い逃げして無いだろ！教室を出たらだよ」

「マジで行くのかお前ら…」

「おうよ！？あんなひょろそくなのの一人や二人！」

いつの間にか復活した相川がガツツポーズをして答えた。

…うわあ、頼もしい。

『『ありがとうございましたー！』』

えらくきれいにハモつた声に驚くとウェイターとウェイトレスが一
列に並んで彼らを見送つてゐる。

「vipですか？」

一瞬ぼおつとその光景を見てしまつた。

「鴨だあ――――カモネギだ――――――！」

脱兎の如く飛び出して行く相川。

神速で一人の前に行き行方をふさぐ。

「力モネギイイイイイイイツイ！――ゲットダゼエエエエエエ――！」

「ん？」

出口から出ようとした二人のうち一人が胸ポケットから何かを取り出しながら相川の顔を見た。

ピタ ふむ 相川 樹 一年生 か

相川の動きが止まつた

「出席番号一番…なるほど…家族は母親と父親と妹の四人暮らし」

「趣味は…？？？が？？？で？？？をすぬ」とか…「

突然奇声を上ける相川

そう言つて相川を柱の影に連れて行つた。

數分後

「燃えたよ……燃えつきたあ……まつしろだあ……」

「おい、こいつのところだけ何で背景白いんだ？」

「御用どいか全體白ござる」

ぐつたりと控室の椅子にもたれかかり、力無くうなだれている。

その姿を見て、誰かが「立て！立つんだあああああ…！」と絶叫している。

「まあ、あの人には挑んだんだから当然といえば当然だよね」即座に飛び出すのをためらつた生徒の一人がしみじみといふ。

「誰だつたんだ今の？」

「知らないのか？今の人には葉山・」

途端「うぎやあああああああ！！！！！ いうなあああ！！ 助けてえええええ！！」と真っ白な背景から悲鳴が聞こえるが、無視した。「葉山・巧つていつてまあ、人の弱みとかいろいろ握つてる人」「一瞬金髪でピアスして銃火器乱射している『糞』^{ファッキン}が口癖の人を思い出してしまいましたが？」

「ん。たぶんその人であつてる。実際ポケットに手帳忍ばせてるしね」

チラッと相川の方を見る。

「まだに頭を抱えて激しくのたうち回つてる様子を見るとかなりとんでもないような内容の秘密がばれていたんだろう。南無。

「だから大抵はみんなすぐに逆らうことことができなくなるってワケ」「なるほどねえ」

「ゴメンナサイゴメンナサイゴメンナサイゴメンナサイゴメンナサイゴメンナサイ」
「ほんとにこいつはどんな秘密をばらされたんだ…」

そんなこんなで、相川が再起不能のまま文化祭は終わりを迎えた。そして、運命の集計。

「今回の売り上げは…」

ゴクリと誰かがつばを飲んだ。

「ひい、ふう、みい…」

「今から数えるんかい！」

「あははは、冗談冗談実際は56万とんで25円」

「ヒラく飛んでるなおい」

結局どうなんだろう。売り上げは一位だつたんだろうか？

「結果はすぐにはわからないみたいだね、全クラス出し物が違うわけだし、そこら辺考慮して後日教えてくれるみたいだよ」みんな緊張していたのだろうか、その一言で幾分か空気が和らいだ気がする。

「結局一位をとつたとして、このお金はどうやって使うんだ？」

まあ、このぐらいは当然の質問だと思つ。

『それは当然』

クラスが全員ハモつた。

『口止め料だ』

先生までが声をそろえていた。

『…まじっすか』

なんか、どつと、疲れた。

もう、かえつて寝るとしよう。

荒れる貸衣装屋

「投票の結果・・・貸衣装屋に決定しましたーー！」

「どつとわき上がる男性陣。
まあ、わからなくもない。」

おそらく、男の趣味丸出しのものとが混ざつてゐるのだろう。
それとは対照的に女性陣は不満の声を上げている。

「どうか、なんか俺をピンポイントに文句つけられてるんですが。
・
匿名性も何もないほんとに・・・」

「あつはつはつはーー南も男だもんなあーー？」
ばしばし叩きながら相川が笑っていた。

「色々あるぜえ？メイドに、巫女に制服に・・・」

「つつさい」

一言で叩き伏せようと右ストレートをたたき込む。

一瞬でそれを見切り軽く首を横にそらしてよける。

「・・・・」
「・・・・ふつ」
鼻で笑いやがつたーー

「パンチというのはこう打つのだーー！」

言うが早いが、相川から放たれる高速のジャブ。

とつさに体制を低くして回避を試みるが、容赦ないその攻撃は空を
切りながらも近くにいるクラスメイトを一発一人餌食にしていった。
・

「カモ——ン・ボオ——イ」

「カーン！」

俺たちの間にのみ聞こえるゴングが今、鳴つた・・・
とたんにお互いに距離をとり、相川は左腕を二字に曲げ振り子のように左右に振り右腕は顎をカバーするように構えている。

俗に言うヒットマンスタイル。

ざわつと教室がざわめく・・・

そう、知る人ぞ知るあれは「死に神の鎌」

そこから放たれるフリックカージャブは逃れることは至難の業となる。

「クククク・・・・」不気味に笑う相川。

心なしか、眉毛が真ん中に濃く寄つているような気がする・・・
対する俺は体を上下左右に揺らし、的を絞らせないようにする。
がつちりと腕を折りたたみ、顎、水月、をガードする。

じりじりとお互いの距離を縮めていく。一瞬早く相川が射程圏内に
俺をとらえた。「かはあっ！」

不気味な気合いとともに放たれる変則的なジャブ・フリックカー。
しなやかな筋肉が作り出す独特的の軌道。

死神の鎌は一転鞭となつて襲つてくる。

被弾しながらじりじりと前へ詰める。あと一歩で射程圏内。
じり、じり、じり。

フリックカーを全て被弾する覚悟で。
はいつた！射程圏内！

一息に飛び込む。

爆発力の要は足の親指。

踏張りが効くからこそ、一瞬で距離をつめることが出来る。

肝臓リバー！もつた！

左足で踏み込み、体の中心を独楽の軸のように回転させて撃つ。

当たれば悶絶は必至。

ヒットマンスタイルの弱点を突いた一撃は、しかし相川には届かず空を切る。

「 つち」

舌打ちをしていつのまにか取られていた距離を測り直す。バックステップでいつのまにか逃げられていたのだ。

相変わらず振り子はリズムを刻み、南をチクチクと牽制する。

「 ふう！」

短い気合いと共に再び飛び込む。

相川も距離をとろつとバックステップを…

取れなかつた。

背中が急造のリングバー（机）にぶつかってしまったのだ。

「 チイツ！」

逃げられないことを悟りフリツカーを繰り出す。

死神の鞭は容赦無く標的を叩くが獲物は中々怯まない。

上下左右小刻みにゆれる標的。

直線的な動きはやがて曲線を描きだし、有限な動きが無限の意味を持つ軌道を刻む。

右へ左へ再び右へ。

振り子のように規則正しいそれは、しかし殺人的な威力を拳に乗せている。

ギュバ！ギュバ！

奇妙な音は上履きのゴムと床が摩擦で上げる悲鳴。

「 左右に振り子のように規則正しく動くこれはあーーー！」

突然降つてわいた様に黒板の前に手書きで

「りんぐあな」

と書かれた札を机の上に乗せた学生が一人、これもまたどこからか持ってきたのか（恐らく放送室）マイクを片手に実況を始めていた。

一瞬教室が静まりかかる。

突然の来訪者に視線が集まる。

それに気をよくしたのか、満足げに実況を続ける珍入者。

「実況は私、葉山巧！」

勢い良く自己紹介をして教室の廊下側を指差す。

「解説は日野 トウマがお送りします！！」

「おい、俺もかよ」

さあつと教室の温度が数度下がった様な気が生徒全員に感じられた。

「試合会場は一年C組にて、放送は全校放送でお送りします！」

ハイテンションな実況が試合（死合い？）を無駄に盛り上げる。

「お、入った」

すっかり忘れられた二人に視線が戻る。

渾身の力をこめた左拳が見事に相川の肝臓にめり込んでいた。

「きょく～れつ！！南選手の凶悪な一撃が相川選手に突き刺さりましたああ！」

歯をくいしばり、痛みに耐える相川に更に追撃の一撃が襲いかかる。

「～～！」

とつさに顔面を両腕で守る。

（来るぞ来るぞ来るぞ！）

ガツチリとはをくいしばり、恐らく来るであろう最大の一撃に対する覚悟を決める。

最大の攻撃は防がれれば最大の弱点に直結する。つまり、次の一撃さえ防ぎきれば。

「…勝てる」

誰に聞かせるで目なくぼそりと一言。

瞬間突然左側から一撃が撃ち込まれた。

「相川選手しつかりとガードしたあ！」

ガードを崩そうとした瞬間右側から激しい衝撃。

「南選手反撃をゆるさない！」

右、左、再び右。

容赦ない連打が襲いかかってくる。

(一) しがもこれは

心の中で少しづつ打開

「テントシード川か」

角言行ノ一言

「左右からの激しい連打！しかもそれが全てKO必至の一撃！」
実況が興奮したように巻くし立てる。

おはようございます！

教室で興奮の渦に食われる

リングバー（机の塔）が激しく崩れ落ち、その上に相川が倒れ込む。実況席から飛び出してきた生徒が突然両の腕をつかみ高々と掲げる。その瞬間会場（教室）はけたたましい歓声に包まれた。

気分はノリノリのインタビュアーだ。

「どうですか!? 因縁の相手を打ち倒した気分は!?」

文選卷之三

なるほど！確かに強がりた冊が無いといふ
うらうら。まじでアゲハ二頭をばがうイソタガローリー

「たゞねど、敗者の相三選手ですが

胸ポケットからなにやら少し使い古された黒い手帳を持ち出した。
やつと教室中の温度が下がる。

—
?

ビクツつと担架の上で瀕死の患者のようにしていた相川が跳ね起きる。

גָּמָעָנָה

ものすごくよく響く負け犬の

「…………はい！相川選手の暴露プロフィールは以上です！」

「…助かつた？」安堵の表情で葉山を見る。

「続きましてねー、相川選手の赤裸々な秘密を暴露させていたたきます。」

「“じうぞー”」なんていこながりよへ、ユースキヤスターがVTRを流すときの動きをする。

ג' עט... ג'

「赤裸々」な私生活がVTRと文字の解説付きで流された。

「何時撮影したんだこれ…」

葉山と一緒に入ってきた生徒がつぶやいた。

「一か八、別上? あまつとカメのを藩か

偶然撮影しちやつてたんだよねえ」「

しれつと叫び。」

二
：

偶然「カヌ子を落として」偶然「空手全員分」を偶然「撮影」しているのかも知れない……
そう誰もが思った瞬間だつた。

.....

200

葉山巧が無事に帰った後、南たちは5秒間相川に対しても黙祷を行つ

た後せつせと会場準備を開始した。

とは言つても、着替えのスペースと衣装置き場を作つただけで教室もいつぱいいつぱいになつてしまつたわけだが。

「すゞいな…本当に何でもそろつてるよう見えるから不思議だ…メイドにバーニガール、看護婦に巫女さん。

「…ほんといろいろあるな…てか、誰だ作ったやつは」

基本といわれるところからマニアックなところまで揃えられているらしい。

ぎりぎり開店は間に合つたわけだが、後は人が来るかどうかだ。幸い撮影スペースは隣の教室を何故か無償で借りられたので、ありがたく使わせていただく。

「男、いらなくねえか?」

非常に居づらい。

なにせ9割方女性用の服だ。

なんて言つか、女性用下着売り場に迷い込んだみたいな?
「外出できます…」

そう言つて教室のドアを開けたところ何か見知った顔が一人。

「あ

「お

「よつ

驚き顔一人、ご機嫌顔一人。

今まさに入れ違いにならうとしていたのは先ほどまでのヒセりんぐあなたこと葉山巧と一緒にいた解説の生徒。

「さつきはおもしろいものを見せてもらつたけど、ここは何をやつてるんだ?」

教室の中を見回しながら興味津々と聞いてくる葉山…先輩

「貸衣装です、隣の部屋で撮影もできますよ」

「ほう…貸衣装ねえ…」ギラリと葉山…先輩の目が怪しく光つた。光の速さで衣装の列を駆け抜ける。

数分後、満足げな顔で帰ってきた。

「ありがとう……」そつそつと興奮しながらいきなり俺の手を握つてきた。

「ポケットから携帯電話を取り出して、どこかに掛けている。

「どこに掛けてるんだ？」

いやにご機嫌な先輩に声を掛けるもう一人の先輩。確かにヒノ・トウマといつたつけ。

「んー？ノノ力ちゃんのと」

もう、満面の笑みで返す先輩。

「ほう……」

ヒノ先輩は急に低い声を出して携帯電話を右手で握った。

ミシ…メキメキメキ…

パキン…

「あ…」

「…え？」

「ふん」

携帯電話、つぶれました。

「あーっとそعدだな、いい店じゃないか？」

必死に今日の前で起きた現実から目をそらす葉山先輩。

「…俺はあまりの光景に言葉を発せられなかつた。

「確かにいろいろな服がそろつてるな」

怒氣を含みつつも感心した声で相づちを打つ。

「ただなあ…残念だ…ひじょ…………」「せんねんだよ

「な…なんですか？」

やばい、さつきの暴露でこの先輩の恐ろしさは身をもつて相川が示してくれた。

まさか俺も赤裸々VTR+文字付き暴露の刑か！？

おれのあんなことやこんなことやあれもこれもそれもどれも……！

「チャイナドレスが無い！」

「……？」

「……」

「ちやいなどれす」？

「知らないか？中国の伝統的な服装だが」「いやそれは知つてます。

てか、あるはず。

さつき見たし。

「ありますよ。そこいら辺に

指さしたところを逡巡するが、見つからなかつたらしく落胆して戻つてくる。

「無いな・・・残念だ非常に残念だ。」「

「はあ……」

ものすゞく落胆している先輩。

なんかこのまま背景の一部になりそうだ。

「ふふふふふふふふふふふふふふふふ……」

どこからともなく聞こえる笑い声。

「ん？」

「お？」

声の出所は……着替えように作った個室の一つからだつた。勢いよく開かれたそこから出てきたのは。

「出番アルネエ――――――でべろつぱあああああ――！」

出現した瞬間吹き飛ぶナーフ。

反射的にハートブレイクショットとカエルパンチとドラゴンフィッシュと勇気と正義の3プラン。

三人の背中には天（一人点）と書かれていたとかいないとか。

「なんでおれだけえええ――！」

叫びながら一階の窓から落ちていく相川君。

「死んだか？」

「死にましたね」

「むしろ死んどけ」

一人明らかな殺意を持つて落ちた窓から下をのぞく。

「あ、生きてた」

……チツ

誰だ！？今舌打ちしたの！？

振り返った瞬間クラス中の人々がみんな目線をそらした。

荒れる貸衣装屋（後書き）

何のネタが入っていたかわかる人はいたでしょうか?
結構好き放題やらせていただきました。
キャラは名無しの物語の人たちが壊れました。
ゴメンナサイ。

欲望渦巻くフリーマーケット

「投票の結果フリーマーケットに決定しました！…」
ぱちぱちぱちぱち…。

控えめな拍手が教室内に巻き起つ。

「なんだよお、貸衣装屋じやないのか…」

心底残念そうに頃垂れる相川。

この様子ではこいつはそつちに一票入れたのだろう。

「男子も女子も敵に回さずに済むのがこれしかなかつたんだよ、
そう、どちらを選んだとしてもその後の学校生活が変わつてしまつ
気がするのだ。

大いに。

「では、各自持つてきつている物を教室かその周辺にシートを引いて
露店を作りましょう」

委員長の掛け声でクラスはざわざわと遅すぎる準備を始めた。

「じゃ、俺も準備してくるな」

「おう、行つて来い」

軽く挨拶をして相川と別れる。

まあ、準備といつても教室の外の廊下にブルーシートを引いて自宅
周辺の人の家から分けてもらつた不要物を並べるだけなんだけど。
数も無いし、ゆつくりと商品を陳列していると教室から声が聞こえ
てくる。

「あ、相川つて何を持つてきたの？」

「…」

沈黙。

うわ、すゞく嫌な気がしてきた。

「…アーヴィ

「…………テヘ」

「死刑囚一名はいりマース」

『三口コンティーー。』

「ぎやああああああああ！やめてええええ！！脱がさないでええええええ！」

「ええ！」

え。

悲痛な相川の叫びは、偶然教室の前を通つたほかのクラスの人が興味を示すほど壮絶な物だった。

覗かれそうになつた瞬間にカーテン閉められてたけど。

「…………で、これはなんですか？」

目の前には首輪をしているメイドさんが一人、柱に首輪をくくりつけられている。

背中には大きく『いらっしゃいませご主人様』の文字。

そのメイドさんは力なく項垂れながら地べたに座つている。

普通に見つればそれなりに悪くない絵だろ？
剃り残しの髭さえ見えなければ……

しかも結構目立つてる。

「商品忘れたらしいから、罰ゲーム」

クラスの女子が嬉しそうに言つた。

その手には貸し衣装屋で使うかもしけなかつた衣装たちが数着握られていた。

「おおおおお！起動全市ガンザム！！秋刀魚大聖デモンヘイン！！」
外から聞こえてくる雄叫び。

間違いなくその商品は俺が近所の方たちからいだいてきたプラモデルのタイトル。

できれば大声で言つて欲しくないんだけど・・・

「なんだ、このパチモンの匂いブンブンなプラモは・・・」

叫んでいた方に比べて大分落ち着いた…というか、呆れていのうな突つ込みも聞こえる。

「何を言う！確かにパチモノだが、発売三日で製造中止の上商品回収になつた幻の一品たちだぞ！！」

「何があつたんだ・・・」

「大人の事情だ」

「あ、葉山先輩と日野先輩ですか」

大声の主は葉山 巧。突込みをしているのは日野 トウマと言つてある意味ではこの高校でいちばん有名かもしれない一人だ。

「おー、お前のクラスだつたのか南。ところで、このプロモードコードに入れたんだ？ん？包み隠さず教えてもらおうか？」

「先輩、それ、脅迫」

「ん？」ちらちらと胸ポケットの中身を見せてくる先輩。

「近所の浪人生のお兄さんからイタダテキマシタデスハイ」

「他にもあるのか？」

「陸用堂の抜糸・ザ・スタンピードのフイギュアなら・・・」

『なにいいいい！』

なんか、今先輩以外のところからも声が聞こえたんですが。

『む！？』

声を発した高校生と髭面メイドの間で一瞬火花が散つた。

「南！俺にくれ！むしろ売つてくれ！初回限定幻の品あああああああ！！！！！グエ！？」

首輪が柱に繋がれているのも忘れて陸上部も真つ青のスタートを切つた瞬間首を吊つて相川君撃沈。

南無。

「なんだ、あれ」

バケモノでも見るような眼で見ないで下さい。カワイソウナ子なんです。

「商品を忘れたから見たいですけどね」

「ほお・・・結構ひどいことするんだなお前のクラス」

あんたが言いますか。

言いながら抜糸・ザ・スタンピードのフイギュアを手に取る葉山先

輩。

「いくらだ？」

「あー・・・そういうやまだ決めてなかつたけどこれくらいで
そう言つてピースサインのように指を一本立ててる。

「そりか！一万円かあ！」

即座にポケットをまさぐり財布を取り出す先輩。
中から新品の諭吉さんが飛び出してきました。

「いや、一千円です！」一千円！」

諭吉さんを一人手にもつていた先輩の手が止まつた。

「何・・・？」

何かまづつたことでも言つたかな・・・？

まさか、俺の赤裸々な生活が全校生徒にばらされるとか！？
「ありがとう！…」

「え？」

ガツチリと握つてくる先輩の両手。

うわ、すっげえうれしそうな顔してて。

「いや、しかし、これを一千円と言つのも・・・」

突然真剣に悩みだした。

その視線の先にはいまだに伸びてる髭面メイド。

「・・・あれは、商品か？」

一瞬何を聞かれたのか分からなかつたけどとつあえずうなづく。
「いくらだ？」

「一千円」

「買つた！！

「売つた！！

この瞬間俺は今日一日なら葉山先輩を味方につけられると確信した
！！

豊北高校一日最強伝説！！

「あー、これいくら？」

水を差すよつなほのぼのとした声。

「200円です～」

声の先には教室内で犬の首輪を吟味している日野先輩の姿が。

真剣に首輪を選んでいる。

「先輩の家つて犬飼つてるんですねか？」

「いや？ あいつと妹の二人だけのはず・・・ハツまさかああああああ！ 野々香ちゃんに首輪を付けて毎日あんな事やこんなことをおおおおおー！ 羨まし過ぎるぞ！」

隣でさあままな妄想と戦つている人を無視して、足元のメイドもぞきを踏みつけて日野先輩の所へと向かう。

まさか、マジで妹さんにつけるのか・・・？

「いや、なーんか、近いうちに必要になる気がして・・・なんだろ？ かこの真剣な田つきは。

隣で伸びてる馬鹿とか、妄想で頭を抱えてのた打ち回つてる方々ならいざ知れずこの人は嘘言いそうに無いしなあ・・・。と、いうか、首輪二つ買おうとしてるじゃないですか。

「これとこれをくれ」

「400円です～」間延びした声を出した女子にお金を渡し、赤と青の首輪をポケットに入れる。

「む？ 二つ？ 野々香ちゃんしか妹は居ないはずだし・・・ハツまさか！ キサマアアアー！ 雨の日にダンボールの中のネコミミ少女を拾つたかあああ！」

「この人、一応この高校で一番怖がられてるんだよね・・・？」

「妹だけに留まらず、ネコミミまで手に入れて首輪を付けて毎日・・・つふつふつふつふ・・・」

なんか不適に笑い出したぞ・・・

「ふおおおおおおおおー！ 羨まし過ぎるじやねえかああああああー！ 讓れー！ 猫耳で言いから俺に譲れー！ むしろ俺も一緒に飼つて下さいー！」

完全に壊れたよ、この人。

「良し、何ならこの出来そこないメイドと君の猫耳をトレードしよ

うじやないか！」

「レートと需要を考えろ。誰がそんな髪欲しがるか。第一家には妹と俺しか居ないだろ？」「うが」

ダメだ、完全にイツチャツタ。

「ねこみみイイイイイイイ！ イヌミミイイイイイイ！ バンザー！」

一一一
「！」

馬鹿（売却済み）が起きた。

「やっかー野々香ちゃんにイヌ///をつけてね！」
ザーッ！動物耳は永遠に不滅です！！

ミスター耳マーニア。

永遠に不滅です！！

「わーウ」は「わー」の「わー」が「ウ」で終わる。

「イヤ、家には姫と俺だけだし、姫は異々香だけだから、お前の姿
想みたいな事はしてない」

ピシシ

ミスター（略）1号、2号の頭の中から何かがひび割れる音が聞こえてきた。

『あああ・・・俺（達）の固有結界アーマルイヤー・オブ・ヘヴン
がああああ』

なんですか、そのゴミにしかならない癖にコストが高そうな特殊能力は。

「ふふふ・・・燃えたよ・・・真っ白だあ・・・なんか前もこんな事があつた氣がするううううう・・・」

妄想で頭の中身を受験勉強並に使い切ったメイドモドキはそのまま前のめりに倒れそうになつて、やつぱり首輪のせいで首を吊つている。

うめき声が聞こえなかつた分今回のほうが深く入つたらしい。

「なんだ、俺の勘違いか。」

「つらはずいぶん素直に立ち直つてゐる。

まあ、この冷め切つた空氣はどうにもならないみたいだけど。

「やうだよなあ、トウマがそんなことするわけないよなあ」

「そう言いながらチラチラと胸ポケットをアピールするハヤマサマ。

なんて言つたが、色々凄いですコノヒト。

胸のポケットの中身を知つてゐる人は皆「ククク」となずいてゐる。

「で、こいつをどうするかだな」

目の前で首を吊つてゐるメイド（脛毛末処理）を見下ろして考へる事数秒。

「これ以外に衣装は？」

「巫女服、シスター服、ナース服、女王様服、スク水（新・旧）その他もろもろ痒いと頃に手が届くラインナップでござります」

メガネを怪しく光らせながら委員長が答えた。

てか、お前は今までどこに隠れていやがた。

顔がほのかに赤くなつてゐるんですが・・・」 いつもアーマリヤー・オブ・ヘヴンに当てられたのか・・・？

「そりか・・・では、スク水の準備を！！それと、付け毛と付け耳と髪剃りとショービングクリイイイイームを持つてこい！！できれば胸パッドもだ！！」

葉山先輩の号令によつて教室内外のフリーマーケット店舗から必要な物がどんどん掘り出されてきた。

ネコミミ、付け毛、剃刀、ショービングクリームはいいとして、誰だ、胸パッドやら金的サポーターを中古で販売しようとした阿呆は。

「・・・まさか、マジでそういうとは・・・」

頬を引きつらせつゝ揃いも揃つた物を眺める葉山先輩。

それも一瞬の事すぐにいつもの冷静沈着な顔に戻りクラス中を見回した。

「では、これよりこの無精髭メイドを立派なスク水少女に見た目だけでもしてやりたいと思つ・・・」

大きく息を吸い込んだ。

「こべぞ、諸君……」

『つおおおおおおおおおおおお……』

その日豊北高周辺に軽い地震が起きたと言つ。人ごみの上を舞う脱がされたメイド服。シコウカウカウカ・・・白い泡が床屋などで見るひとのできるような手付きで塗つしていく。

脛に。

じょり。

じょりじょりじょりじょり。

生半可に脛毛が硬く長いために恐ろしいほど分かりやすい音が響いてくる。

ある程度そり終わつたところで水のみ場から持つてきた水をかけると、そこには真つ白な肌が蛍光灯の光を反射していた。

「つむ」

満足げにつなずく葉山と助手達。

続いて逆の足、両腕、両脇、髭と順順に男らしい毛が剃られていく。

「・・・」

そり終わり、つるつるになつた相川の四肢をみながらも渋い顔の葉山先輩。

「・・・こじも、やつちやう?」

ここにやかに、相川君の最後の髪を擦り下ろすといつてくる。

「・・・(じくつ)」

あ、女子が全員うなずいた。

男子にいたつてはなんか、コンセント探してきて、あ、ヴィイイイイイイイイイイイんつて音がしてゐる。

「足の付け根まではそれでどうぬつとつあるとして・・・」

「やはり、メはこれですか」

「ソレデスナ」

綺麗に洗つて念入りに消毒（万が一傷つけたら大事のため）までし

た妖刀^{キャミソリ}が怪しく輝いている。

「では、これより仕上げに入るとする。卑猥な表現が苦手な物は今すぐ此処から戻るように！－！いいか！－戻るんだぞ！間違つても下を押したりドツラグしたりちょっとだけ・・・なんて下心を持つんじゃないぞ！－！」

「サー・イエツサー－－－－－！」

「あ、女子は向い向いて、さすがにトライアウスマになると困るから。こいつが」

「・・・（興味津々の様子で首を振る）」

「あー・・・あつた。まあいいか」

そういうて勢い良く最後の砦となるぬのつきれを擦り下げる、手際よくつけたゴム手袋にクリームをつけ濃密に生い茂った密林に重厚な雲を擦り付けていく。

「・・・こいつて、誰か剃つた事あるか？」

・・・とてもこの場では言えそうにない質問を投げかけながら、黙々とクリームを塗りつけ、すぐ横で伐採の準備をしていくこの世で最凶の切れ味を漏つた妖刀^{キャミソリ}。

「よし、こんなもんでいいだろ？」

密林は今や雪が降ったかのようにな真っ白。

一昔前のコントとかでこんな事をやっていたのを見たような気がする・・・いや、実際に剃つては居ませんでしたよ？

「キャミソリの準備を」

「ハイ」

即座に渡される剃刀。執刀医に機材を渡すようにタイムラグが無く滑らかに渡す。

すおり・・・ズオリイイ・・・脛毛のときよつも生々しい音を教室中に響かせながら、暗黒の密林は徐々にただの禿山へと変貌していく。

「・・・む」

ぴたりと葉山の動きが止まる。

「キヤミソリが・・・毛に負けた・・・」

どうやら切れ味が落ちてしまつたらしく、次のキャミソリを催促し

見た目ただ新品の剃刀。

・・・もういい、何も言いませんよ・・・

そりそりそりそりそりそりそりそりそりそりそりそり

シシシシシシ

11

現場に居る男子が一瞬固まつたのは誰つまでも無いだろつ。

「よし、こんな所か」

勢い良く水を浴びかけて秀山と化したそれは姿を表した

文字通り生まれたままの姿になつた相川はいまだに氣絶したまま。

ドライヤーで直に乾燥させられて、すでに準備されていたスク水（田）をせつせと着せられていた。

しっかりとサポートーも忘れずに付けられている。

「・・・足りないな」

そこには毛という毛を髪の毛意外剃り落とされた哀れなスク水少女が居たのだが、葉山先輩にとつてはそれはまだ納得のいくものではなかつたらしい。

「・・・胸パッド」

一
一
一

即座に渡される普通の胸パット。

慣れない手付きで両方入れて相川の方を一、二発叩く。

「むお？お？あれ？何で俺寝てるの？」

起き上がつた相川・・・モトイ、スク水少年（ありとあらゆる物処理者）

理濟

「おめでとう、君は生まれ変わったんだー！さあ、これから第一の人生を味わうがいいー！」

ぱちぱちぱちぱち・・・温かい拍手に迎えられた少年は今までの色々と報われなかつた人生を振り返り・・・泣いた。

頭をぽりぽりと搔きながら立ち上がり・・・

「アレ？なんか、すうすうする・・・」

不思議な違和感を感じていた。

なんというか包む物がなくなつた変わりに何かがぴつたりとフイットしてしたり、胸には何かがついてるような気がしたり。なぜか腕とかが滑々する。

「仕上げはこれだ」

そう言つて田にもとまらぬ早業で相川の頭上にネコミミと付け毛をつけて人間の耳をうまいぐわいに隠すと言つ職人芸を披露するニスター動物耳一号。

「おおお・・・」

男子女子その完成度の高さに一瞬呆けてしまつぽど。口々にため息が漏れる。

「ショートカットのネコミミ少女（旧スク水）」

「鏡だ！鏡を持ってこい！…」

葉山の叫びにいち早く反応した数人が思い思いに鏡を探し出す。さすが高校。

女子はすぐに鏡を見つけた。・・・といつか自前の物を持つて來ていた。

「さあ！…自分の顔を見てみるんだ！むしろ前進余す所無く見るんだ！」

葉山に進められて渋々自分の様子をチェックする。

「・・・！…」

すぐに頭に手を当てる。

「・・・！…（なかなか取れなくて慌てている）」

「アンアルファでくつ付いています」声高々にアンアルファを

持つて宣言する葉山。

マテラ

「どこの世界に急にネコミミが生える人間が居るんだ・・・」トウマの的確な突っ込み。

「何を言つ……」といわゞ反応する葉山。

— 我々人間は目で見た情報を電気信号として脳に伝えてそれが「見

えていた『と鑑賞せざるのだ!! 急に生えてくるのだ』で脳は直接
そのような信号が送り込まれていれば不可能ではぬあああああい

「…………」（魄の晴々感一驚物）

「いいのかそれで？」

（脇）脇）豈か弟もれていた事に

「む？」

その……とにかく頑張ってもそいはね……少女じゃなくてね

たか？

・・・・・ああああああ！！！」

（まさかと思い水養の下の密林を確かめる）

違ひ意味で絶叫する一人

い い い
ん ち づ く し
・ ・ ・
」

- 3 -

「なぜ顔を赤らめるうううううううう！？」

「なー? 誰が顔を赤らめているかー!ー!」

「お前だお前このメガネ!ー!」

「な・・・そういうのなら自分の姿をもつ一回良く見れば良いー!ー!」

タイミングよく先程の鏡探しに行つた男子が到着。ドドから持つて来たのか全身が写るタイプの鏡を持ってきた模様。

「どこから・・・」

「さあー!ー見るが良いー!ー!」

「俺が自分を見て、どうじろつてこう・・・ん・・・だ・・・

・・・

声が徐々に小さくなる相川。

「・・・ぼ

あ。

「・・・うぞだああああああああああー!ーしつかりしお前ー!ー

頭を抱えてもだえ苦しむ。

あ、窓から逃げようとしてる。

「かえるうううううー!ー!」

「待て!首の鎖を勢い良く引っ張られ再び沈黙。

「良く死なないなこいつ・・・で、何をしてるんだお前は」

「ん?いや、せっかくの傑作だからさ写真でも取つて置こいつかと思つて。」

こうして相川君の新たなトラウマが刻まれる事となつた。

欲望渦巻くフリーマーケット（後書き）

「名無しの物語」の登場人物の葉山君大活躍です。
コメ先生からはオッケイもらっているので問題はないのですが… 壊
しそうなかもしないですね。
… 本編よりすこしく書きやすかつたです。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1405a/>

SOULEATER番外編-嵐の文化祭-

2010年10月28日03時14分発行